



まつもと・さち 1987年高知県生まれ。2010年に入社し、仙台、山形、大阪生活文化部などを経て文化部。20年から児童書取材を担当。子どものころに夢中で読んだのは、怪談と推理小説。ツイッターは@Sachi_Matsumoto

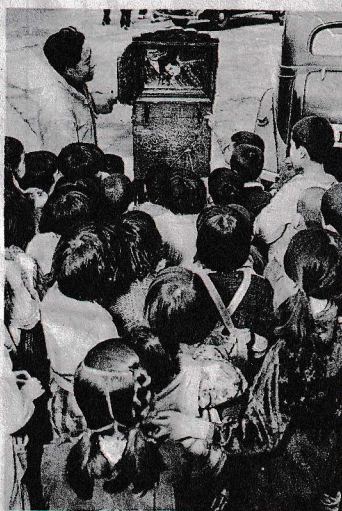
取材考記

東京文化部

松本紗知

3月20日朝刊の文化面「扉」欄で、「紙芝居」をテーマに取り上げた。その取材を始めたばかりのころ。取材先で「朝日新聞は昔、紙芝居のことをずいぶん応援してくれたんですよ」と言われた。てっきり良いことだと思い、「そうだったんですね」と間の抜けた返事をした自分が、今となっては恥ずかしい。取材先の言う「応援」とは、朝日新聞社が戦中、戦意高揚を目的に作られた国策紙芝居の普及に、大きな役割を果たしたことを指している言葉だった。

国策と紙芝居 共感呼ぶ力 利用された過去



1950年ごろの街頭紙芝居。戦後いち早く復活し、このころ、第2の黄金期を迎えていた

紙芝居は1930年に手描きの街頭紙芝居として生まれ、瞬く間に子どもたちの心をつかみ、全国各地に広がった。その強力な「伝える力」が注目され、布教や教育を目的とした紙芝居が出版されるように。そして40年代には、国民を戦争へと駆り立てる国策紙芝居が盛んに作られた。朝日新聞社は、その出版会社に出資し、紙芝居を売り込むために新聞の販売店網も利用した。紙芝居文化の会代表で、童心社会長の酒井京子さんは「紙芝居には集団の共感を呼び起こす力がある。その力が戦争に利用されたことを、紙芝居に関わる者は絶対に忘れてはいけない」と話していた。それは、紙芝居を利用した新聞社の人間も同様だろう。

物語。子のもとにチョコレートが届いたその日、父の戦死が知らされる。また、女手一つで昼も夜も働き、息子のために形見の櫛まで手放した母と、その母に戦地から櫛を送った息子を描いた「櫛」も、今の時代に見ても「美しい」と感じてしまう力がある。ほかに、落語調のものや、漫画のキャラクターが登場するもの、報道写真を使ってニュースを伝えるというものもあった。もし自分が当時を生きていたら、こうした紙芝居に疑問を持たたのだろうか。実は、少し自信がない。

一人一人が思考停止しないこと、異論を言える社会であることが大切だと痛感している。そして、子どもたちを夢中にさせる紙芝居の力は、人生を豊かにするためだけに使われてほしいと願う。